

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



このたび新たに当館コレクションに加わった逸品。江戸後期の画家、椿椿山つばきづんによる画卷で全九図からなる。久能山周辺からはじまり、箱根・賽の河原へと至る東海道沿いの風景を描く。これらの中には清水や田子ノ浦など駿州から眺めた富士を描く五図が含まれる。この図は原と吉原の間から望む、白雲をまとう富士山から愛鷹山にかけての光景（裏表紙も参照）。小画面ながらその雄大なパノラマをみごとに捉えている。道行く人やかわいらしい家々も旅情を誘う。椿山には他に国の重要文化財に指定されている同題の三巻本が知られており、それらと元来一具であった可能性も指摘されている。江戸時代の静岡の麗しき風景を伝える、当館の新たな目玉となる作品である。

（学芸員 浦澤倫太郎）

No.
117
2015年度 | 春 |

創立三十周年を前に、一歩前進！

館長 芳賀 徹

私たちの美術館は静岡市南東部の有度山と呼ばれる丘陵地帯の中腹にある。すぐ東隣に県立図書館があり、

やや下手に県立大学のキャンパスがひろがる、という配置である。県立のこの三施設は、他に埋蔵文化財センター、グランシップ、SPAC（静岡県舞台芸術センター）という近隣の県立施設とともに、二〇〇六年以来「ムセイオン」と称する連携組織をつくり、ともにさまざまな文化活動を企画し、交流を進めてきている。

これらの施設のなかでも図書館は一九二五年開設、一九七〇年に現在地に新築移転したというから、一番の老舗である。蕃書調所などの江戸幕府旧蔵書「葵文庫」という宝ものを保管することで有名だが、また私たちにとっては至極便利で快適な書斎。こちらが探す程度の新旧の書物はすぐに検索して貸出してくれる。その上に、同館入口のホールの棚に

は、大概の場合、美術館で開催中の企画展に関連する書物を選びだして並べておいてくれる。そのゆき届いた配慮に感心し、感謝するばかりだ。

県立大は美術館より一年早く創立、今年が三十周年になる。前学長の木苗直秀教授や特任教授の立田洋司氏とはムセイオンでの親交があり、最近では理事長の本庶佑博士にもときおりお目にかかる。ところがこの大学で問題なのは、学生さんたちと美術館でお目にかかることが余りにも少ないということだ。大学からは美しい林の中の散歩道をわずか五分、絶好のデートコースではないか。毎週のように遊びに来て欲しい。しかも大概は入場無料で、目下開催中の石田徹也展でも、このあとの篠山紀信展やスイスデザイン展でも、若い彼らを必ずや自他の新発見にうながしてくれよう。

たしかに、大学では学生も教授も

みなそれぞれに忙しい。誰かがイニシアティブをとって「そうだ、美術館、行こう」とでも言い出さぬ限り、毎週おきまりの日程からは脱けだしにくからう。——だがそれならば、と美術館の館長は考える。本館に十名ほどはいる学芸員が、毎週交替よりは一ヶ月交替ぐらいで、非常勤講師としてお隣に出かけて、毎週一コマでも授業をして学生さんたちを挑発し誘導する、というのはどうだろう。

学芸員は自分がいま研究している美術史の問題、あるいは主担当として編成した美術展・文明展にかかわる問題を、蘊蓄と情熱を傾けて若い人たちに語るのだ。その講義あるいは演習のうち二、三回は学生たちを美術館に連れてきて実物を前にしてその面白さを説けばよい。いま県立大は人文社会系の「国際関係学部」を中心として学科とカリキュラムの

再編成を真剣に考えているらしい。そのなかに本館提供の東西美術史、日本文化史ないし富士山学の一列をリベラル・アーツの必須の課目として組み入れて貰うのである。

この交流はむしろ美術館側にこそ大きなメリットがあるのかもしれない。授業では、ある程度筋道を立てて、文献を読ませ絵を見せつつ、自分の研究を面白くわかりやすく学生たちに伝え、彼らの心身に知的刺激を与えねばならない。声も大きく明朗にし、学生たちの反応にも臨機応変に対処しなければならぬ。学芸課の狭い室内で、仲間うちで見つめあい囁きあっている状況からの、一つの脱出路であり、解放である。学芸員の職務の第一は研究、その本館創立以来の理念の再確認にも大いに有効な試みとなるだろう。

富士宮市には二年後には県立の富士山世界遺産センターが稼動する。有度山西麓には同じく県立のふじのくに地球環境史ミュージアムがやがて創設されるという。これらの新機関とも親密に連携し、競いあつて、美術館をさらに開かれた多忙で活気ある日本文化研究の中核としていこうではないか。

教育普及の新たな取り組み アートカード

主査 神谷 洋介

二月中旬、教育普及プログラムのなかの美術館教室の一つ、粘土教室が今年度の実施予定分を終えた。最終日、参加した団体は特別支援学校の幼稚部十名と三保育園合同実施の六十五名。子どもたちの明るく元気な笑顔と口々に出てくる「楽しかった」の声はいつもと変わらず耳にすることができた。

園児や児童、生徒を対象とした学校団体向けのプログラムの中では粘土教室・絵の具教室の人氣が最も高く、抽選の結果により参加希望が叶わない団体も多い。体験いただいた園や学校からのアンケートでは子どもたちだけでなく、引率の先生の満足度も高いことが窺える。これらの活動は美術館ならではの特色を生かした、園や学校との連携を深める柱の一つと言ってよいだろう。現在、美術館教室という名目で設定し

ている園・学校向けのプログラムは全部で十ある。多くが鑑賞系のプログラムであり、粘土・絵の具教室に代表される制作系のプログラムも含め、指導者や進行役が主体となつて成り立つものばかりである。そういった中、教育普及では新たな取り組みを行うこととした。それがアートカードである。アートカード自体は既に多くの美術館において貸し出しや販売、出張授業等で用いられており、全国で鑑賞用の教材としての認識が広がりつつある。

当館の収蔵品をもとに作成した四十八枚のアートカードは鑑賞支援教材として平成二十七年四月より、運用を予定している。販売は行わず、貸し出し教材、または出張授業で使用するものとなるが、アートカードに期待されることは、遊びながら学ぶことのできる学習教材としての使

用である。アートカードには作品名も作家名も記されていない。作品の画像写真とカード番号、天地を表す矢印が印刷されているだけである。児童・生徒は、まずカードを手にとってその作品だけを目にする、ということになる。勿論、はがき大くらいのサイズに印刷されているカードからは実物だけが持つ、色や質感、大きさといった実感は得られない。だが、アートカードの手に取りやす

さは、四十八枚の中から児童・生徒自身が好きな作品を選び、作品について自分の意識を向け、言葉や体で表現するといった活動を自ずとひきおこす可能性に繋がるだろう。目に



カードとカードの共通点を発表しあう活動風景



任意で選んだカードがどのカードか当てる活動風景

する機会が増えることで子どもたちの想像力や感想が深まるのであれば、美術館に来館することを考えにくい昨今の園や学校の引率管理事情に先生方が頭を悩ませることなく、アートカードを利用する意義、ひいては本物の作品を鑑賞したいという意欲が芽生えるかもしれない。

今年度は試験的にアートカードの貸し出しや出張授業等、多くの体験に携わってきた。蓋を開けてみなければわからないが、体験された先生方からは実際の鑑賞に繋がりたいといった手応えのようなものを感じている。アートカードも粘土教室同様に園や学校との連携を深める柱の一つとなるよう、じっくりと推し進めていきたい。

平成26年度 新収蔵品・寄贈作品の紹介

開館以来、当館では購入の他、多くの方に寄贈いただくことでコレクションの形成を続けて参りました。「東西の風景画」や「静岡ゆかりの美術」を収集方針の主軸とし、総数は二六〇〇件を越えるまでになりました。

平成二十六年度は一件の作品を購入し、また四十一件におよぶ作品をご寄贈いただくことができました。ここではそれぞれの作品について、担当の学芸員よりその概要をご紹介いたします。また、これらの作品は「新収蔵品展」（平成二十七年四月七日(火)〜六月二十一日(日)でご覧いただくことができます（期間中、一部展示替えがございます））。

【日本画】

日本画では一点を購入し、四点をご寄贈いただきました。

購入作品は本号の表紙を飾る椿椿山つばきさん《山海奇賞図巻》です。久能山を

はじめとする静岡の風景をみずみずしく描き出した珠玉の画巻。今後様々な展覧会で活躍し、江戸時代の風景表現の面白さ、奥深さを語ってくれることでしょう。

静岡ゆかりの画家・杉浦俊香によ



杉浦俊香《溪山避暑図》1916（大正5）年以前



速水御舟《芍薬図》1923（大正12）年

る掛幅三件《溪山避暑図》《山水図》《雪景山水図》は、作品を大切に守り伝えてこられたご遺族から頂戴しました。幕末に生まれ昭和初期までを生きた俊香。独学により身に付けたという堅実な技と、高雅な趣が見どころです。

近代日本画を代表する一人、速水御舟の作品も、ご寄贈によりこのたび初めて当館のコレクションに加わりました。《芍薬図》は、深紅の花

の艶と、葉陰に雨宿りする雀の愛らしさを、そぼ降る繊細な雨脚越しに描きます。細密描写と情趣とが高度に昇華された画面は、御舟の魅力を存分に伝えてくれます。

（上席学芸員 石上充代）

【日本洋画】

今年度の日本洋画は、牧野宗則氏から版画作品十八点をご寄贈いただきました。牧野氏は、静岡市のご出身で、版画の道一筋で制作に励んで来られました。浮世絵版画の



牧野宗則《久遠》1986（昭和61）年



牧野宗則《華の風》1998（平成10）年

優れた技法と創作版画の精神性とを融合し、富士山をはじめとする自然の生命の輝きを見事に描いています。なかでも《華の風》は、葛飾北斎の影響を受けながら、色彩と造形において独自の表現を追求した作品ですし、また《久遠》は、《有明海シリーズ》の中で唯一のモノクロー

ムの商品で、その色彩は深い精神性をたたえています。牧野宗則氏の卓越した版画技法と華麗なる表現をじっくりとご覧ください。

(上席学芸員 泰井良)

【現代】

今年度、現代ジャンルでは、十九点の作品のご寄贈がありました。ここでは、その一部をご紹介します。ただきます。

伊藤隆史は、一九五八年に清水を拠点に発足した、グループ「白」の中心メンバーとして活動した画家です。一九五〇年代末から一九六〇年代初頭に制作された絵画五点をご寄贈いただきました。当時、清水で食堂を営んでいた伊藤の家には、グループ「白」の事務局がおかれていま

した。伊藤は、公私ともに美術評論家の石子順造との親交が厚く、当時の批評からは、石子が伊藤を高く評価していたことがうかがえます。

シルクスクリーンによるポスター二点もまた、石子順造ゆかりの作品です。《『漫画主義』No.1》は、石子が若い編集者と同人を結成し発行した、漫画批評同人誌のポスターで、赤瀬川原平がデザインを担当しました。石子の呼びかけで、谷川晃一、木村恒久らが立ち上げた、ポスター研究、制作、販売グループ「QUA（クア）」が発行元となり制作されたものです。谷川晃一氏より、ご本人がデザインを手がけた、ゴダール映画祭のポスターとともにご寄贈いただきました。

一九六六年に、静岡で結成された、



赤瀬川原平《『漫画主義』No.1-4ポスター／QUA発行》1969（昭和44）年

グループ「幻触」のメンバー飯田昭二の、鏡によるトリックを巧みに生かした作品《Half and Half》は、地元静岡でおこった前衛集団の活動を中心に伝える貴重な、当時のオリジナル作品です。

長らく静岡大学で教鞭

をとり、後進の育成にも尽力した、長岡宏の絵画二点をご寄贈いただきました。長岡は、フランスへの留学から帰国後、目まぐるしく変化する美術の潮流の中で、一九六〇年代末より国際的にひろがりを見せた、ハイパーリアリズムに大きな影響を受けました。寄贈作の一つ《MITSUI BUILDING》は、前年に竣工したばかりの東京新宿の三井ビルを取材した作品です。

磯辺行久の《パラシュート・キャノピー》は、自然現象と深く関わる屋外でのプロジェクトの記録を版画にしたものです。磯辺を、後の環境計画への探求へと導いた作品の一つです。

彫刻家、淀井敏夫は、動物の中でも伸びやかな肢体を持つキリンを好み、繰り返し表現しました。石膏原型《幼いキリン・堅い土》もその一つで、石膏直付けの手法で具象彫刻を追求した、制作のプロセスの一部を知

ることができません。

嵯峨篤の《Repose/009-017》は、家具や建具など日用品に広く使われるMDFを素材にして、表面に塗装と研磨を繰り返し制作された作品です。最小限に切り詰められた形と色が、デリケートな光沢を際立てています。

貴重な作品をご寄贈くださいました皆様には、心より御礼申し上げます。(上席学芸員 川谷承子)



淀井敏夫《幼いキリン・堅い土》(石膏原型)1985（昭和60）年



伊藤隆史《現代人A》1959（昭和34）年

『公教雑誌』と生巧館

上席学芸員 南 美幸

日本でキリスト教系の雑誌が定期的に刊行されるようになったのは一八八〇年代以降である(註1)。これらに掲載された図版は、オリジナル挿絵であれ、何らかの原図を元とする模写であれ、開国後の日本でどのようなキリスト教主題の作品が存在したかを知る上での一次資料となる。この小論では、カトリック系雑誌の『公教雑誌』に焦点を当て、同誌と、フランス留学を経た山本芳翠(一八五〇・嘉永三〜一九〇六・明治三九年)と合田清(一八六二・文久二〜一九三八・昭和十三年)とが一八八八(明治二一)年に開設した洋画塾・生巧館との関係から、明治期のキリスト教画をめぐる状況の一端を紹介する(註2)。

『公教雑誌』は、パリ外国宣教会の司祭たちによって一八八九(明治二二)年十一月に創刊され、その後二度の改称を経て(註3)、一八九三(明治二六)年四月の九三号で終刊した。フランス人司祭らの原稿を日本人信者が翻訳した内容は、布教のみならず、教説・学説・雑録のほか、時事問題なども扱う総合教養誌的性格を呈している。こうした特質は同誌の挿図にも反映された。創刊号から五六号まで、キリスト教主題に限らず毎号二から三件挿入された全一六七件に及ぶ図版は質量両面で非常に豊富であり(註4)、同時代のキリスト教雑誌の中でも群を抜いている(註5)。加えて同誌の特質は、生巧館との密接な関係にある。両者の関係は、創刊号及び二号の最終頁に掲載された生巧館塾生募集広告からうかがい

知ることができる。ここには、フランスで木口木版を学んだ合田が率いる同塾版画部が「仏国高等美術彫刻師たるの名譽」を持ち、「公教雑誌の仏国人諸氏より過分の愛寵」を得て、「毎号に二三個の精密木版を彫刻すへき特約」を結んだ旨が記されている。生巧館による挿図提供は、実は先の広告文どおりには実施されなかったが(註6)、キリスト教主題の挿画に関し、次の二点で同館は重要な役割を担ったと思われる。一つは、一六七件中十六件のキリスト教主題の図版のうち二件に加えて表紙を制作したこと(註7)、もう一つは、フランス由来と思われるキリスト教画の図版の将来者または掲載の助言者である可能性が考えられることである(註8)。

一号から五六号まで一貫して用いられた続けた表紙の制作を生巧館が行なったことは、同誌におけるその存在の大きさを物語る(図1)(註9)。主題や制作状況などを示す資料は今のところ見つかっていないが(註10)、中央の一段高い所に両手を上げて立つ人物、その左右に分かれた様々なポーズと表情の人物群は、キリストと十一人の使徒たちだろう。図像としては、弟子が一人不足しているものの「山上の垂訓」、または復活後「使徒たちに使命を与えるキリスト」の可能性が考えられる。合田清および生巧館草創期に下絵を版画部のために制作した山本芳翠の作品中に類似のキリスト教画は見られず、またそのような絵画を描いたとする資料も見当たらないため、少な

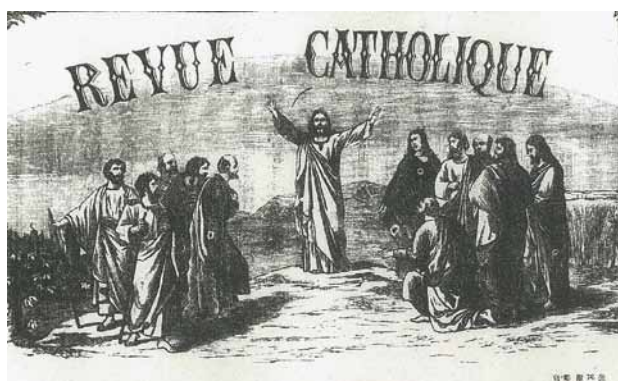


図1 『公教雑誌』2号表紙(1889・明治22年11月)
(1995. マイクロフィルム『近代日本キリスト教新聞集成』日本図書センターより)
東京大学文学部所蔵

くともこれがオリジナルの挿絵である可能性は低い。何らかの原図を模写したとする資料も、また参照源と類推される作品も今のところ見つからないが、恐らく合田または山本が渡仏中に入手した作例を元に、生巧館が木口木版で彫版した複製図版ではないかと推測され、一八八九(明治二二)年という早い段階で日本人がキリスト教絵画を制作した貴重な作例と言える。

次に生巧館制作以外のキリスト教主題の挿画について。全十六件の宗教画図版の中の九件には、イメージの下に *Extrait du Pelerin* という記銘がある。「巡礼者選集」とでも訳せるこれらの図版には、「仏国美術木版」および「仏国巴里印刷」の但し書きがついている。よって、恐らくは冊子体

として綴じられたこの作例集の中から、本文の記事内容に合致するものが選択され、掲載されたと思われる。この選集の将来者としては、『公教雑誌』関係者のパリ外国宣教会司祭たち、または合田と山本の二人が考えられるが、渡仏中の合田とサロンとの関係から、後者である可能性が大きいのではないだろうか。

『公教雑誌』三七号（一八九一・明治二四年五月）附録画として掲載された《聖イジドルス耕田之図》は、リュック・オリヴィエ・メルソン（MERSON, Luc-Olivier. 一八四六〜一九二〇）の《耕す人、聖イシドルス》（註11）を原画として、レオン・ルイ・シャポ（CHAPON, Léon-Louis. 一八三六〜一九一八?）が木版画で複製した作品である（図2）。メルソンの油彩画、シャポの木版画は、ともに一八八三（明治十六）

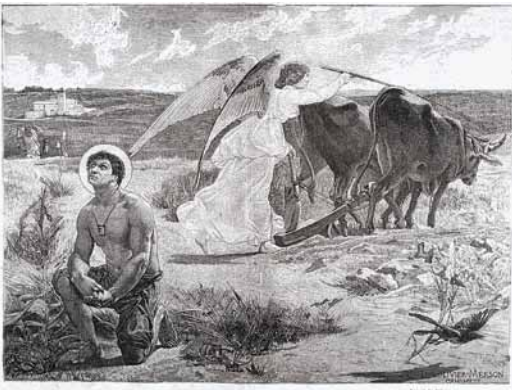


図2 《聖イジドルス耕田之図》『公教雑誌』37号（1891・明治24年5月）附録画
東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫所蔵

年のサロンに出品された（註12）。一八八〇（明治十三年）年から七年間にわたる渡仏中、合田は一八八五（明治十八）年と翌年の二回にわたってサロン出品を果たしており、これらは何れも油彩画を木口木版で複製した作品である（註13）。あくまで推測の域を出ないが、一八八三（明治十六）年のサロンを合田が訪れ、複製版画であるシャポの作品を実見し、注目した可能性は否定できない。とすると、「巡礼者選集」図版の将来者ではないにしても、最新のフランス美術の動向に触れた結果、同号にふさわしい挿画の転載を助言したことは十分に考えられるのではないだろうか（註14）。

これまで述べてきた事実と推測はささやかではあるが、明治期のキリスト教絵画の流入・受容・普及を検討する際、欠くべからざる事例であろう。

- 1 明治政府によりキリスト教が解禁されたのは、一八七三（明治六年）年二月二四日。
- 2 明治二十年代初めから明治三十年代初めの日本の美術界では、キリスト教を主題とする作品は、美術家による制作の面でも、また展覧会などの公開の面でも、いまだ一般的ではなかったと思われる。下記の拙稿参照。二〇一四年、南美幸「下岡蓮枝のキリスト教絵画―『手本』を中心とする考察」（静岡県立美術館紀要 第二九号「十一〜二〇頁」）。
- 3 四二号（一八九一年七月）までが『公教雑誌』一四三三号（一八九二年八月）から五六号（一八九二年二月）までが『公教雑誌』五七号（一八九二年四月）以降が『日本公教雑誌』。
- 4 九三号まで全号の目次を調査した結果に基づく。五七号以降図版は極端に少なくなる。以下の分類は本文の後述と併せて参照されたい。一号から五六号までの目次から知られる総図版数

は、表紙を除くと一六七件（実際に確認できた図版は一六六件）。この一六七件の図版のうち、主題別にみると、キリスト教主題は表紙を除いて十六件、うち生巧館制作が二件、「巡礼者選集」が九件。制作者別では、表紙を除き、一六七件のうちの十一件を生巧館が制作。

- 5 挿画の豊富な他の雑誌としては、正教会系の『正教新聞』とプロテスタント系の『聖書之友月報』（後続雑誌『聖書之友雑誌』）がある。
- 6 件数としては全一六七件の一割を下回る十一件に過ぎない。註4参照。
- 7 四号の挿画《聖嬰耶穌、瑪利亞、若瑟之肖像》および十号の挿画《カタコンベ聖堂之聖堂》。何れも拝見した資料には欠落しており、現物を確認できていない。
- 8 西田武雄によれば、合田は一帰朝の際五百餘枚のエッチング、木口木版、石版、銅版等の作品を将来したという。一九三四年、西田武雄「木口木版の話」『エッチング』二五号、二六四頁。
- 9 二号以降の「生巧館彫刻」の銘が入られた図柄と、記録のない一号の図柄とが同じであるため、創刊号から生巧館が表紙を提供したことは明らかである。
- 10 記事の中に挿画を簡単に説明した号もあるが、表紙については見当たらない。
- 11 一八七八年、油彩・キャンヴァス、ルーアン美術館所蔵。
- 12 1883. Catalogue officiel des ouvrages de peinture, sculpture, architecture, gravure et lithographie des artistes vivants: exposés au Palais des Champs-Élysées, le 15 septembre 1883. Paris. Imprimeries Réunies.
- 13 一八八五（明治十八）年、フランス美術協会サロン展にシャルル・オーギュスト・ロウ（LOYE, Charles Auguste. 一八四一〜一九〇五）原画の《風景》を、また翌年にはジャンゼリゼ宮でのサロンにエミール・アダナ（ADAN, Louis Emile. 一八三九〜一九三七）原画の《一日の終わり》を出品。両作とも現在東京藝術大学美術館所蔵。
- 14 同号にはドルワール・ド・レゼーの教説「聖イジドルス」が掲載されている。

は、表紙を除くと一六七件（実際に確認できた図版は一六六件）。この一六七件の図版のうち、主題別にみると、キリスト教主題は表紙を除いて十六件、うち生巧館制作が二件、「巡礼者選集」が九件。制作者別では、表紙を除き、一六七件のうちの十一件を生巧館が制作。



本の窓

細谷恵志
『落款のてびき』

株式会社三玄社 二〇二二年刊行

今から二年前、当館に学芸員として就職するときに、大学の先輩からいただいたのがこちらです。「学芸員になったら必要になるから」ということでした。落款とは書画に付された「サイン」と「ハンコ」で、完成したしるしです。たとえば新収蔵品の速水御舟『芍薬図』では「御舟画」という署名と二種の印があります。また作者だけでなく、時間や場所、さらには何のために描かれたのかといった情報が記されることもあり、作品を研究する上で重要な存在です。この本では、実際の作品を例にとりながら、様々なタイプの落款がわかりやすく紹介されています。みなさまも美術館で作品をご覧になるときは、落款にも注目してみると、思わぬ発見があるかもしれません。

（学芸員 浦澤倫太郎）



人を育てる場所

前実技室エデュケーショナルスタッフ 半田直生

美術館とは、人と人が繋がる場であると考えています。静岡県立美術館での勤務を通じてその思いはより強くなりました。

昨今では様々な媒体や手法で他者と繋がりを持つ機会が増えているようですが、一方で実感を伴ったコミュニケーションが求められる場面も増えているように感じます。

目と目を合わせて言葉を交わし、笑い合うこと。
自分の身体で素材に触れて
かたちを作っていくこと。
となりの人の手で作られたものから、
その人らしさが漂ってくることに
気付くこと。

それは、美術館で時代や土地を越えて自分の前に立ち現れる作品を、より深く鑑賞し、新たな発見や喜びを得られる人間を育てることに通じているのではないのでしょうか。

私が勤務させて頂いた実技室は、そういったコミュニケーションを発生させる重要な場の一つでありました。年間を通じて実施されるプログラム一つ一つが体験する人にとってより良いものとなるように、企画から講師の方とのやり取り、材料の用意、道具の手入れなどの準備を

していく時間は、私にとって特に大切なものでした。一緒にその時間を過ごす仲間に三年間恵まれたことは、この静岡という土地を大切に思うことにも繋がりました。

ただ、こういった取り組みが真価を発揮するには時間が必要です。また、継続的なプログラムの実施は、スタッフの連携や意識の共有があつて為せるものとも思っています。

プログラムの経験を重ねることに、育てて頂いたのは私や他の実技室スタッフも同様です。そして、人間が育つということは、ささやかながらもその地域を豊かにしていくと信じています

末尾ながら、美術館で出会ったすべての皆さまに御礼を申し上げます。これからも静岡県立美術館に文化芸術の喜びが満ち、実技室に笑顔があふれることを、心より祈っております。



実技室スタッフと（筆者は中央）



表紙の作品

椿椿山（山海奇賞図巻）（部分）
紙本淡彩 一巻
13.5×466.5cm
1830（文政13）年

利用案内

開館時間：10:00～17:30（展示室への入室は17:00まで）
休館日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。
(Tel: 054-263-5857)



風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

2014年 美連協奨励賞（美術館表彰）

展覧会名：『美少女の美術史 浮世絵からポップカルチャー、現代美術にみる“少女”のかたち』
担当者：村上敬（上席学芸員）

2014年 美連協カタログ論文賞 「優秀論文賞」（個人表彰）【自主展部門】

論文名：『グループ「幻触」と石子順造』
執筆：川谷承子（上席学芸員）

平成27年度 企画展スケジュール

篠山紀信展 写真力 THE PEOPLE by KISHIN
4月11日(土)～6月21日(日)

日本・スイス国交樹立150周年記念
スイスデザイン展 SWISS DESIGN
7月11日(土)～8月23日(日)

世界遺産登録記念 富士山 一信仰と芸術一
9月5日(土)～10月12日(月・祝)

ふじのくに芸術祭2015
10月20日(火)～11月3日(火・祝)

写真家の眼/版画家の眼 6つのアンソロジー
11月8日(日)～12月9日(水)

ウィーン美術史美術館展 一風景画の誕生一
12月19日(土)～平成28年3月21日(月・祝)

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。